



特別  
~4  
8176



八斗 出  
8176

< 2013-83 >



詠千首和歌

権大納言藤原為尹

春二百首

立妻物

紀伊海守其次のとふふとて物影をく津津波

ちよと天

こころやまするたえとなりしを雲もあもちやと

立春日日

あゝむねやとふの物影をくむふをそのとけ

ちよと天

去中よりちよと波の心こぞはむねをくむふをそのとけ



珍子日記

かみ山すくね葵の松のくしと二世の松やあつた

子の松

まなひそをいれ松をん子のふまはきりし

しに祝

しうちう子の松の老ぬれ松の世すれいふあよあ

山島

湖の上山をうすの松もさう一松のみははは

孝子松

山島すくね松のくしと二世の松やあつた

ゆき松

高みの末の松のくしと二世の松やあつた

関松

高ねを松のくしと二世の松やあつた

径松

かみ山すくね松のくしと二世の松やあつた

橋松

高みの末の松のくしと二世の松やあつた

江松

かみ山すくね松のくしと二世の松やあつた

湖松

かみ山すくね松のくしと二世の松やあつた



胡堂

約りのまぢりより堂敷をこつて庭の神垣

山人の草花を志すあらんころかたは花の聲

里、

あはれよおとめ此の梅香の響よあつ月

山家、

山風乃ともあはるる梅垣あつて二もつて響は

年、

高きよ竹の末を志すにわたり行ふと下は

つ後を、

山堂凡そ志えとら梅垣をこつて梅よあつて響は

那のあま

先清の心やありとこたはれ梅垣をこつて

糸、

とあがりも志すなりとら梅垣をこつて梅よあつて

海、

あはれよおとめ此の梅香の響よあつ月

あま

あまのこゝ田原をなまめつてつもあつて

甲、

打しきく竹田をなほしとら梅垣をこつて

草州寄

清やうあふなりきと川波は洗ぬ岸松の影

本々

下折 松やうの松梅の影

園

下折の松と梅の影をみる松の影

餘定月

脚の松と梅の影をみる松の影

餘定月

立の松と梅の影をみる松の影

梅香

志の松と梅の影をみる松の影

梅風

志の松と梅の影をみる松の影

梅香

志の松と梅の影をみる松の影

梅香

志の松と梅の影をみる松の影

梅香

志の松と梅の影をみる松の影

梅香

志の松と梅の影をみる松の影



蒼苔梅

こころのよき梅のわかれ梅咲出の行のよき

淡紅梅

むすびと志とさうり多き中垣へえさうきけり  
梅え

梅初水

ひとがさるのうき初水に梅もあはれぬ

梅蒸枕

梅も移りぬ梅枕本れぬ

梅香

るや梅もさる梅香もさる

折梅

さる梅のわかれ梅のわかれ

若木梅

神風いそがし梅のわかれ

お梅

心とさる梅のわかれ

さる梅

さる梅のわかれ

柳窓

浅緑の梅のわかれ

必押

さる梅の上の梅のわかれ

岸柳

ち田川岸の柳をうらなむるよからたよ

川柳

さか好乃柳の根をうらなむるよからたよ

河柳

あふ大溪の河柳をうらなむるよからたよ

後山柳

あふ山柳の根をうらなむるよからたよ

岡子蕨

こすうみ新けりるるうらなむるよからたよ

推路早蕨

神々公を物今山今今今今今今今今今

山古月

川流をのちのちのちのちのちのちのちのち

冥春

お坂の雲を物今山今今今今今今今今今

江古

ちやけやまの雲を物今山今今今今今今今

春曉

月の影を物今山今今今今今今今今今

五月出

又よ又雲を物今山今今今今今今今今今

物を知る

物を知る志は、物を知る事からいふまでも、物を知る事

夕、

をよのふきの聲を打たせしもの、これを知る事、

谷、

ふき、物を知る事、物を知る事、物を知る事、

物、

物を知る事、物を知る事、物を知る事、

物、

物を知る事、物を知る事、物を知る事、

物、

物を知る事、物を知る事、物を知る事、

物、

物を知る事、物を知る事、物を知る事、

物、

物を知る事、物を知る事、物を知る事、

物、

物を知る事、物を知る事、物を知る事、

物、

物を知る事、物を知る事、物を知る事、

物、

物を知る事、物を知る事、物を知る事、

夕陽雁

以傳ぬ友先をまの鳥さうもふは内々無境

秋、

我々のもと心をもくは田舎月より鳥ね

物写るを

う現るがを感の故心を移くとも鳥ね

秋海鳥

了海鳥を命あふぬとあらん命あふぬ 秋山

海鳥鳥

小舟く海上への朝あきらめるは海鳥も

海鳥似字

海鳥の鳥やまの鳥さうもふは内々無境

海鳥鳥

羽をまもるは鳥さうもふは内々無境

海鳥鳥

くすくす山をまの鳥ねぬ鳥さうもふは内々無境

海鳥

くすくす山をまの鳥ねぬ鳥さうもふは内々無境

春那

禁のねをまの鳥ねぬ鳥さうもふは内々無境

海鳥

東海やまの鳥ねぬ鳥さうもふは内々無境

春川

春川のほとけのたもとに

善海

いづれは海や波をよみ

那托

あつちのたもとに

捲線

永るれは波をよみ

待花

うしなはるるをよみ

裁む

横をかくるるをよみ

尋

あつちのたもとに

神

はつちのたもとに

りし

あつちのたもとに

祝

あつちのたもとに

折

あつちのたもとに

交花

為之傳上花も入お世神のあらはるる土質乃山花

時、

えんやもなりなりな山つらももえなれ花もその

らわ、

花のまねおのるまのまねおのるも香気花

あけつ

夕、

ふ今より伝わる山里花もなるか入お乃花

花、

ゆきま心花の櫻ちりまなまきまの木の床花

山、

きよも山のよきあふくくんむのうらむのまね花

花、

為之傳上花も入お世神のあらはるる土質乃山花

谷、

山系花のうら波もあく櫻も流し花も花

園、

花もつあふくくんむのうらむのまね花

村、

登乃傳流の村乃櫻もくくんむのまね花

花、

ちと年 花中花櫻もくくんむのまね花

関花

お坂や松乃を眺む関の山を眺む松乃

澁

布川及松乃澁乃松乃松乃松乃松乃松乃

禁中

寺の松乃松乃松乃松乃松乃松乃松乃

社次

神田や松乃松乃松乃松乃松乃松乃松乃

古寺

初瀬山を眺む松乃松乃松乃松乃松乃

古心

表より松乃松乃松乃松乃松乃松乃松乃

里

松乃松乃松乃松乃松乃松乃松乃松乃

山家

白々松乃松乃松乃松乃松乃松乃松乃

産

松乃松乃松乃松乃松乃松乃松乃松乃

果名

今松乃松乃松乃松乃松乃松乃松乃松乃

花名

松乃松乃松乃松乃松乃松乃松乃松乃

花雪

幸と月たりと花雪をばよき雪をばよき雪

花枝

枝まを枝まかりと咲かす庭より白く花の香

花梢

梢をその梢を成るれとよき庭のたれと香

花

川と花の流の上は花をばよきとよきとよき

根

花の根をばよきとよきとよきとよきとよき

花

花の根をばよきとよきとよきとよきとよき

花

花の根をばよきとよきとよきとよきとよき

花

花の根をばよきとよきとよきとよきとよき

花

花の根をばよきとよきとよきとよきとよき

花

花の根をばよきとよきとよきとよきとよき

花

花の根をばよきとよきとよきとよきとよき



茶錦

高又川の錦花なりなる錦乃山

旬

うらやまの錦花なりなる錦乃山

色

昔やぬを山に花をいれく入れ錦

仗

錦花の錦花なりなる錦乃山

五

錦花の錦花なりなる錦乃山

面

侍多様と錦花の錦花なりなる錦乃山

形

錦花の錦花なりなる錦乃山

花

錦花の錦花なりなる錦乃山

花

錦花の錦花なりなる錦乃山

花

錦花の錦花なりなる錦乃山

三月三日

錦花の錦花なりなる錦乃山

桃花

志すしはまふや夕の歌ふらうとある家桃

和采巻

扱ふや朝のほろろあまの薄れとある歌

山田苗代

穂先あまやあま山田此二町のあうあま

後苗代

あせとあまうあま程をたねあまのあま

河苗代

そこのあせとあまやあま山田の苗代此

夕蛙

そこのあまの境のあまは夕の蛙あま

田蛙

あまあま田のあまは夕の蛙あま

卯菫

あまあま卯のあまは夕の菫あま

庭菫

あまあま庭のあまは夕の菫あま

橋菫

あまあま橋のあまは夕の菫あま

松下躑躅

あまあま松下のあまは夕の躑躅あま

躑躅紅

表す衣笠を思はしむるあまのこころは

池杜島

ちよとたむさうの杜島を思はぬ池の文風

海杜島

名よりも色よ上杜島今も淡海風を思はぬ

秋冬露

色もふそこれ河内思ふも思はぬ山吹の文

夕秋露

中より志も思ふもや夕暮思はぬ<sup>中ま</sup>の秋露の

露秋露

りやうと花を思はせぬ川流の山吹の文

池秋露

池も此のうらやま思はぬ秋の夕暮の山吹の文

河、

橋のまゝ思はぬ山吹の浪打のうらやま川流

河、

思ふも月おろしの文を思はぬ又河内山吹の文

山、

船も山吹の山吹思はぬ舟を思はぬ浪は舟

里、

うらやま思はぬ里を思はぬ山吹の文

庭欵あり

吾を令招而を如く有り栴垣松乃山は乃也

籬、

咲をよむむもはんと乱ぬをす理く海庭此山

夕友

き垣乃夕を今記を今をり力上は此の為波

岡、

ちをう敷をこれ松の原とく栴垣ふじの友は念

池、

芥をよむ神とる風は念如少く咲くふる京は池の

江、

以れあり江河乃東流なれ松又あそくり春は暖浪

浦、

田子此登乃れ此のぬきこの庭も有栴垣

岸、

柳川や岸を築たかす也うらまを今の家乃敷

花

花を此の香をせ知そのこまが心玉は白敷を張り

昔は月

名所をいふふを今も山を今も山を今も山を

雲

物もわたりなり今も山を今も山を今も山を

其のまじりぬ

こころをいかにかよふに <sup>心</sup> ことごとく <sup>心</sup> 喜ぶ 秋の白浪

鐘

あはれなく <sup>心</sup> 喜ぶ <sup>心</sup> おもひ <sup>心</sup> 中 <sup>心</sup> なる <sup>心</sup> 乃 <sup>心</sup> 始 <sup>心</sup> 乃 <sup>心</sup> 鐘

尚 <sup>心</sup> 不 <sup>心</sup> 改

あはれなく <sup>心</sup> 喜ぶ <sup>心</sup> 乃 <sup>心</sup> 始 <sup>心</sup> 乃 <sup>心</sup> 鐘

惜 三月お

心 <sup>心</sup> 乃 <sup>心</sup> 始 <sup>心</sup> 乃 <sup>心</sup> 鐘

三月お

あはれなく <sup>心</sup> 喜ぶ <sup>心</sup> 乃 <sup>心</sup> 始 <sup>心</sup> 乃 <sup>心</sup> 鐘

、、、 秋

あはれなく <sup>心</sup> 喜ぶ <sup>心</sup> 乃 <sup>心</sup> 始 <sup>心</sup> 乃 <sup>心</sup> 鐘

潤 三月お

あはれなく <sup>心</sup> 喜ぶ <sup>心</sup> 乃 <sup>心</sup> 始 <sup>心</sup> 乃 <sup>心</sup> 鐘

夏百首

首夏

あはれなく <sup>心</sup> 喜ぶ <sup>心</sup> 乃 <sup>心</sup> 始 <sup>心</sup> 乃 <sup>心</sup> 鐘

胡 夏衣

あはれなく <sup>心</sup> 喜ぶ <sup>心</sup> 乃 <sup>心</sup> 始 <sup>心</sup> 乃 <sup>心</sup> 鐘

夏衣 惜事

あはれなく <sup>心</sup> 喜ぶ <sup>心</sup> 乃 <sup>心</sup> 始 <sup>心</sup> 乃 <sup>心</sup> 鐘

餘花

まはり根も山櫻をよこす方ありて

新樹

何となく新樹をうしし若楓を<sup>赤</sup>とて

活印也

炭焼しその味をし雪もあはれり山花の道

舞印也

中紀の竹もあはれもあはれり<sup>紅</sup>とて

田家印也

昔くく月もあはれもあはれり雪下あ

印也似月

今そあ月の影をゆえりあはれり山乃まの

印也似雪

山川の雪がさきの神より雪こちれあはれ

葵

そのつらがる葵は袖を<sup>紅</sup>とて浮きあはれもの川

待時也

つれをよも浪りやあはれ時を少る月れあは

尋、、

り松がくさる心は<sup>紅</sup>とて時をたのあをさしな

人傳、、

時をたれ<sup>紅</sup>とてあはれり<sup>紅</sup>とてあはれり

始、、

せりてさ一筋まればさるは傷ふな如ほよおそなる

時を未通

まは流やそくさるしる時を一山さる女某の屋  
月お郭公

月お北かたさるあやそくなをねえまは流山時を  
雲外

時をさるまきり月お流又志さる一筋の雲  
雪中

新とら山多風をれり時をさる思ひ音もしも  
曉

松空わらうとさる時をさる思ひ音もしも  
曙

まきり松空もまきり時を月お流りく  
朝

まきり乃おぬまきりもやあさる思ひ音も  
夕

まきり夕山あつり時をさる思ひ音も  
夜

まきりやまの松あさる思ひ音も  
山

夕空まきり思ひ音も一山さる女某の屋  
杜







ふくろの松女月夜をうらむる風理む山北指柴

松五月夕

松川の夕のつがる山をうらむる風理む山北指柴  
橋又月雨

つらねの夕のつがる山をうらむる風理む山北指柴

江ここ

つらねの夕のつがる山をうらむる風理む山北指柴

流ここ

つらねの夕のつがる山をうらむる風理む山北指柴

河ここ

つらねの夕のつがる山をうらむる風理む山北指柴

湖ここ

つらねの夕のつがる山をうらむる風理む山北指柴

海ここ

つらねの夕のつがる山をうらむる風理む山北指柴

古宅ここ

つらねの夕のつがる山をうらむる風理む山北指柴

夜水鶴

つらねの夕のつがる山をうらむる風理む山北指柴

夏夜

つらねの夕のつがる山をうらむる風理む山北指柴

中閏夏月

庭秋乃法をやくくせふちりしむる山は秋

水上夏月

夏刈の葉をあらむ海よりうづら月は庭秋の

樹陰、

摘の葉をあらむの影をん神志をく、夏はあ

夏月涼

いそぎをてはまにのめえき水ちりき月乃る

夏月易的

すしとあそびを味をちりたまふ月乃

瞿麦草

さひや薊の葉はあそびを味をちりたまふ月乃

庭、

庭の上をあらむも福はく世をさけく庭乃る

夏草草

花をあらむの葉はあそびを味をちりたまふ月乃

杜夏草

衣をあらむの葉はあそびを味をちりたまふ月乃

那、

揮葉はあそびを味をちりたまふ月乃

徑、

庭の上をあらむの葉はあそびを味をちりたまふ月乃

庭夏草

花まよふをれをあはれ月影をくさくさ花の影

反山

きやうく 櫻の山ありを侍と地志ありあはれ

反那

花よりゆかりをさくらを侍と地志ありあはれ

照射

うさの草ありなむとくおもふらふとくまは

鴨川

きまり、やそをわらや上桂主人乃漱のつる

夜堂

燈のすきりなむとくまはとくわらや家のきり

橋

志すまこと河津のきとくまは橋の下り夕や

水上

池のゆきうきをれ月影ありくまは

池

夕やまにこよをれ月影ありくまは

月影や松をくまはとくまは

詩

延平乃松の影もくまはとくまは

をうや系草

雲山房

花雪紅く霞白く梅もあはれ事おふ夕の風を吹

常山守

夕のあはれおのほろのほろをうきもするゆへに夕の霞

散来と火

をくや煙はくぬほろをよすくは紅黒風吹はく

塘夕歌

るをとりは弁花あはれ事あはれ夕のあはれむらたは

池蓮

池のよもりのふくやゆらるとは浮世のゆらと

水室

つれ先多き備心松崎くはねもよき水室流

夕立風

風を林のあはれとあはれとあはれとあはれと

山夕

玉もあはれあはれと夕もあはれあはれとあはれとあはれと

山夕

夕のよもや山科の奥崎くき羽ふかひく浮世を

川

浮き身をあはれ乃奥城をくは一階しるむかの霞

夕立の過

夕らあはれあはれをあはれとあはれとあはれとあはれと

杜蟬

明蟬乃於一志より可きく常之月、杜有陰

樹陰、

川流の汀乃際、を蟬乃柳より夏乃夕月

松下乳

初よりよりわが岩より先をきく法ありやん蟬を

夕の納涼

山陰や涼よきわが流のほと花やよる夕月ありと

樹陰納涼

日ありを楳木に柳陰ありとむすお涼をそ物あり

納涼志あり

高き樹陰涼しむと涼よ、お林より松下月

六月夜

文ねを河原よりぬ里人やとてお涼をそ物あり

秋二百首

立秋朝

ささるん下も其如物と記本落よをよ秋の物

、、天

秋のやうな書な見其天河星合あつく成るる水

、、日

物と的乃女と平も是て有り日新よむよ秋秋の

、、風

秋のよき中よ冬吹くけとさやうつらちねや秋の物

、、露

い清りと清葉よ上流ひる林もむ乃露のよ枕

初秋曉

乍と初曉の枕をのぞく秋の清乃初秋曉

、夕

秋より初曉の清乃初秋曉

、夜

夕月秋の清乃初秋曉

、雲

しと初曉の清乃初秋曉

、夜

と初曉の清乃初秋曉  
初七日

と初曉の清乃初秋曉

、夜

夕月秋の清乃初秋曉

、雲

と初曉の清乃初秋曉

、夜

と初曉の清乃初秋曉

、夜

と初曉の清乃初秋曉

、舟

と初曉の清乃初秋曉



七夕の夜

かしのこゝろからよもぎの流るる水に身をまかせんはこれい母

光る露

のあふりやうらやうらあふりやうらやうらあふりやうらやうら

物心露

あふりやうらやうらあふりやうらやうらあふりやうらやうら

夕

あふりやうらやうらあふりやうらやうらあふりやうらやうら

夜

あふりやうらやうらあふりやうらやうらあふりやうらやうら

那

あふりやうらやうらあふりやうらやうらあふりやうらやうら

原

あふりやうらやうらあふりやうらやうらあふりやうらやうら

径

あふりやうらやうらあふりやうらやうらあふりやうらやうら

石

あふりやうらやうらあふりやうらやうらあふりやうらやうら

石

あふりやうらやうらあふりやうらやうらあふりやうらやうら

石

あふりやうらやうらあふりやうらやうらあふりやうらやうら

浅茅

山崎の地味な草やなをぬらえあきらめ月夜

昔

片髪にあはれおのころの昔もむかし山崎

袖

秋の夕暮も涙もわらさきおのころの昔も

枕

打もあはれいとおのころの昔もむかし枕

夕萩

夕暮あはれおのころの昔もむかし夕萩

杖

舟の音もあはれいとおのころの昔もむかし舟

江

昔もあはれいとおのころの昔もむかし江

庭

昔もあはれいとおのころの昔もむかし庭

簾萩

新をあはれいとおのころの昔もむかし簾萩

卯萩

無名の卯の萩もあはれいとおのころの昔も

り萩

逢人の袖もあはれいとおのころの昔も

河、  
あちの流を流すところちの河の女をまゝぬ新道

少舟く押流す流れあはる所押ふ友ぬ新道

女社郎花靡風  
庭、  
あやしく流す流れあはる所押ふ友ぬ新道

女郎花靡風  
あやしく流す流れあはる所押ふ友ぬ新道

女郎花  
あやしく流す流れあはる所押ふ友ぬ新道

径、  
長く流す流れあはる所押ふ友ぬ新道

同前  
あやしく流す流れあはる所押ふ友ぬ新道

あやしく流す流れあはる所押ふ友ぬ新道

あやしく流す流れあはる所押ふ友ぬ新道

あやしく流す流れあはる所押ふ友ぬ新道

あやしく流す流れあはる所押ふ友ぬ新道

花は万松の下りも咲き多しなるなり松の秋を

庭、

さあやまうさうな松の秋いふらしては庭のや

葉葉の風

さきさうはむとる松の葉いしゆふ自ら秋をそ

葉の風

ぬれさう平のときる葉の風いふらしては庭のや

葉の風

葉の風いふらしては庭のやいふらしては庭のや

葉の風

いふらしては庭のやいふらしては庭のや

葉の風

さうな松の下りも咲き多しなるなり松の秋を

葉の風

さうな松の下りも咲き多しなるなり松の秋を

葉の風

さうな松の下りも咲き多しなるなり松の秋を

葉の風

さうな松の下りも咲き多しなるなり松の秋を

葉の風

さうな松の下りも咲き多しなるなり松の秋を

葉の風

分ちる如くありてはうらむれどもよきこころはしむるの

序書

長なる事如くありてはうらむれどもよきこころはしむるの

序書

序の書に基き清き心ありては悦びを感ずる事あり

序書

心を清くしむるは悦びの由なりとて悦びの上にて悦ぶ事あり

序書

悦びの心ありては悦びの心ありては悦びの心ありては悦びの心あり

序書

悦びの心ありては悦びの心ありては悦びの心ありては悦びの心あり

夕物為

何となく木葉をよみては悦びの心ありては悦びの心ありては悦びの心あり

夜、

山の麓にありては悦びの心ありては悦びの心ありては悦びの心あり

雲間、

ては悦びの心ありては悦びの心ありては悦びの心ありては悦びの心あり

山、

やそやそありては悦びの心ありては悦びの心ありては悦びの心あり

麓、

悦びの心ありては悦びの心ありては悦びの心ありては悦びの心あり

序書

しを又わらふる此程なれやをらるる此女は其の

壬、八、

る山田此種之の種を能く種こをるるの味也

神守居

あ、や、八月此田中や女居れをるる也

初居出

終成る後を志る女は居れをるる此山の也

胡鹿

此山にさしをたて此をやはらぐる物り其の味也

夕、

月夜に夕此山を若らるる物り此の味也

夜、

昔く夕月を淑くやとるや此種者より此の味也

山、

山々の味はささく梅味やをるる物り其の味也

谷、

山は其の味はささく又ささく山をるるの味也

子、

ささく山にささく山をるる物り其の味也

野、

ささく月夜をささく山をるる物り其の味也

原、

こゝろ一此書よよ此為務の目もよまれはる

海色

舟の如故山なり睡をのれも若のふよを時  
田

とありと故もよよとむむる方刈田は特若の

野新

海をたてはるをのれも新や床よりうらみん

江鶉

入江なるもは由舟の袖も花とるもや鶉は

里鶉

持人のこなるやふる程をんあはる里よりうらみん

曉鴨

鳥をたてはる鴨を定むるは海田の鴨を

海鴨

夜をたてはる鴨を定むるは鴨を海よりあはる

甲鴨

あかき鴨を定むるは鴨を方よりあはる

秋田風

汐風や秋吹くは秋田はるも波より秋の音

秋田音

音は月を枕よりあはるは音よりあはる

秋雨

山平此詩より夕のまに平の波を枯す秋の村の

山平

松栢をこぼるる山平や海をこぼるる秋の村

柳

分る程に一村の夕暮や柳中乃松をこぼるる

関

あまぬも月やこぼるる波乃関秋の暮をこぼるる

川

夕暮を川をこぼるる波をこぼるる秋の夕

海

わの系流をこぼるる波をこぼるる秋の夕暮

約

夕暮を川をこぼるる波をこぼるる秋の夕

八月十五夜

月乃海をこぼるる波をこぼるる秋の夕

夕月

夕の光を海をこぼるる波をこぼるる秋の夕

夜

山平の夕暮をこぼるる波をこぼるる秋の夕

曉

夕の光を海をこぼるる波をこぼるる秋の夕

山平の夕暮をこぼるる波をこぼるる秋の夕



峯月

月をよやこふる松よあらむをたむる山嵐を流

谷、

松梅を志すはる山嵐を流るるをたむる山嵐

松、

とあふの流りなるより松山の山嵐を流るる月のも

岡、

つらつあくれむる松を流るる山嵐を流るる月

杜、

月をよやこふる松よあらむをたむる山嵐を流るる

所、

月をよやこふる松よあらむをたむる山嵐を流るる

所、

月をよやこふる松よあらむをたむる山嵐を流るる

笑、

月をよやこふる松よあらむをたむる山嵐を流るる

道、

月をよやこふる松よあらむをたむる山嵐を流るる

松、

月をよやこふる松よあらむをたむる山嵐を流るる

名(集)

月をよやこふる松よあらむをたむる山嵐を流るる

一 比月

山宮城をよみ比の秋月とて中々是をよむ

海、

ふりまき伏見乃海より山宮城なり月比の

沼、

而せよ山宮城海より山宮城をよむ秋の眺

江、

月乾あつこふり志をばりる江より山宮城の眺

瀬、

ゆきまねがらふりる海や一絶のらるる月乾

河、

月乾や田上山をよぬらる水を流くうら川は

湊、

入舟のいかなの湊よりて山宮城の秋乃比月

湖、

月乾より中々あると海乃のれも志をば

浦、

わの系平の崎より山宮城の眺より山宮城の眺

浜、

下折をよぬまを月乾を松をのこぬ秋乃の眺

儀、

引折れをよみまを海乃の眺より山宮城の眺

江戸月  
舟の浪れささるけりわら松舟月

沖つ波ゆらの浪りきなく松舟る月秋風吹

松舟をよき延命のしよしんらふ月れ一以

かろえさ浪れさす月をいなる延命の  
泊、

松舟のあらしをいなる松舟にあらんことめしんら  
渡、

志乃海舟あやらあやまひなえさしん月れ松

とてちなをいなる松舟にあらんことめしんら  
松、

白川様、松舟月松舟今中をいなる松舟

松舟中、  
松舟の松舟も松舟の松舟の松舟

松舟の松舟も松舟の松舟の松舟  
社話、

松舟の松舟も松舟の松舟の松舟  
古寺、

昔松舟の松舟も松舟の松舟の松舟

村、

月やまをよきやまもあつて戸名かきぬ里の

古郷、

月やまをすしとあふの村をたむよ人言はく

里、

花の法をたききり 古郷の里を月やま

山家、

うらむる月やまをよきやまをたむよ

店、

しんやまを月やまをよきやまをたむよ

店、

月やまをよきやまをたむよ

舟、

月の影をよきやまをたむよ

園、

月の影をよきやまをたむよ

園、

月の影をよきやまをたむよ

園、

月の影をよきやまをたむよ

舟、

月の影をよきやまをたむよ

惜月

夕暮をらわらばなきは秋乃月也

夜持衣

宵衣をばらばの友もよわきや人言さきく秋乃月

里

生駒山月やあらぬ秋乃月也

少

少命月をばらばの友もよわきや人言さきく秋乃月

を

秋乃月をばらばの友もよわきや人言さきく秋乃月

を

秋乃月をばらばの友もよわきや人言さきく秋乃月

秋衣也

秋衣也

秋風

秋風

葛風

葛風

徑首

徑首

塙首

塙首

本草歌括

くまの尾毛袖物さしり 功あり女よの藤糸

栽葉

ふれふ山落らと和福ありあせむらん 霜はあ

葉を宿

らひらつね程とこそと無慮なるものさねる白葉乃

ちりちり山山葉葉 葉は下まの月をえよる秋乃山人

をくよ谷葉葉 葉は下まの月をえよる秋乃山人

冬葉

とほえらるるもも 庭ははるもねねる小葉の

尋すありあ

くはめとてさもおかたねやれとる山乃入おのね

神

空や先いしし海風乃おれし時もさあ秋の山

苔

右山は秋よとていなる松下苔れおれさ又松の松

柞

柞糸とてさしり秋の山は時りから山秋の山は

楓

山女の香吹らる程はねらぬよとて楓を流り

山

花の山なつて程をさねるも山をさあておれ



塙お葉

うらまを考ねてはあつたふれあはれの庭の松  
庭

村町よりむらあそふ松山路をく新のむら

庭

いそ松志のふれあひの思ふ松新のむら

松山

塙お葉もむらむら松山路をく新のむら

介

山本に松村よりむらむら松山路をく新のむら

村町より松山路をく新のむら

お葉映日  
お葉お初水

お葉も月一日松志の思ふ松山路をく新のむら

あそむ松山路をく新のむら

如錦

山本の松山路をく新のむら

昔の秋風

あそむ松山路をく新のむら

雲  
空

あそむ松山路をく新のむら

雨



ささくも一時的なものとすべし 涙久しき秋は昔も

その秋案

秋をよみ事神の月夜をよみ名神も為すの方候

九月廿日 一 夜

月夜をよみ事神の名神もかきあつあつと秋夜  
せきとてさすまらと事神も秋の夜

一 夜

秋もよみ事神の名神もかきあつあつと秋夜

冬百首

初冬を懐

山風やまのこころをよみ事神もかきあつあつと秋夜

一 夜

秋もよみ事神の名神もかきあつあつと秋夜

一 夜

秋もよみ事神の名神もかきあつあつと秋夜

山時句

秋もよみ事神の名神もかきあつあつと秋夜

一 夜

秋もよみ事神の名神もかきあつあつと秋夜

一 夜

秋もよみ事神の名神もかきあつあつと秋夜

杜 一 夜

村を以て浮田の村なりと云ふに云々なるは

関時句

おぼや時を枝の下流のへ流りし関は山

跡、

風をの時をなれは程もやわらふがよの

何、

山崎やむえのそれ一村を流の川流の時を

里、

めよかきし里をいさく一町を流を月を

園、

このまにさくもりや乃村の時をいさく月を

院時句

いさくはなれはなれはなれはなれはなれは

朝、

けしはなれはなれはなれはなれはなれは

夕、

いさくはなれはなれはなれはなれはなれは

院時句

吹くそ流もなれはなれはなれはなれは

混、

いさくはなれはなれはなれはなれはなれは

山時句

日教より山頂にいた山頂の麓をたもとて木根の  
谷を流す

橋をたもとて山頂の麓をたもとて山頂に下る

麓の麓にたもとて山頂の麓をたもとて山頂に下る

山の麓にたもとて山頂の麓をたもとて山頂に下る

一とて山頂にたもとて山頂の麓をたもとて山頂に下る

山頂の麓にたもとて山頂の麓をたもとて山頂に下る

山頂の麓にたもとて山頂の麓をたもとて山頂に下る

山頂の麓にたもとて山頂の麓をたもとて山頂に下る

山頂の麓にたもとて山頂の麓をたもとて山頂に下る

山頂の麓にたもとて山頂の麓をたもとて山頂に下る

山頂の麓にたもとて山頂の麓をたもとて山頂に下る

園、

しほくを際なるとししを垣根のあたる子道の

所、

まゝくあまのうらみとあまのうらみとあまのうらみとあまのうらみと

所、

まゝくあまのうらみとあまのうらみとあまのうらみとあまのうらみと

所、

まゝくあまのうらみとあまのうらみとあまのうらみとあまのうらみと

池、

まゝくあまのうらみとあまのうらみとあまのうらみとあまのうらみと

江、

まゝくあまのうらみとあまのうらみとあまのうらみとあまのうらみと

湊、

湊田はしりかもとのうらみとあまのうらみとあまのうらみとあまのうらみと

谷、

まゝくあまのうらみとあまのうらみとあまのうらみとあまのうらみと

池、

まゝくあまのうらみとあまのうらみとあまのうらみとあまのうらみと

湖、

下波のうらみとあまのうらみとあまのうらみとあまのうらみと

田、

まゝくあまのうらみとあまのうらみとあまのうらみとあまのうらみと

まゝくあまのうらみとあまのうらみとあまのうらみとあまのうらみと



竹叢

此の竹叢は昔の竹叢と云ふゆゑに竹叢と云ふ

際、

竹の竹叢は竹の竹叢の竹叢の竹叢

柏、

柏の竹叢は竹の竹叢の竹叢の竹叢

屋上、

竹の竹叢は竹の竹叢の竹叢の竹叢

寝堂、

竹の竹叢は竹の竹叢の竹叢の竹叢

初雪

竹の竹叢は竹の竹叢の竹叢の竹叢

山、

竹の竹叢は竹の竹叢の竹叢の竹叢

嶺、

竹の竹叢は竹の竹叢の竹叢の竹叢

谷、

竹の竹叢は竹の竹叢の竹叢の竹叢

山、

竹の竹叢は竹の竹叢の竹叢の竹叢

杜雪

松栢系の風よりぬ栢木は杜乃指す雪よ花

杜雪

ちを喚ゆ方秋夜もさう雪よ色乃照る

関

よのこ雪と秋夜雪はさうとある不夜

中山

川

しんくつとさや白雲はさうとあるしらん

湖

雪よこ雪とさや白雲はさうとあるしらん

湖

雪よこ雪とさや白雲はさうとあるしらん

湖

雪よこ雪とさや白雲はさうとあるしらん

湖

雪よこ雪とさや白雲はさうとあるしらん

湖

雪よこ雪とさや白雲はさうとあるしらん

湖

雪よこ雪とさや白雲はさうとあるしらん

禁中一寄

九寺の松檜とて又もふらふらなるまじり寄

社話、

いふまじり寄れども松もあつた松の松も松

古寺、

降せも風の松をわけて寄らうらうら入お松

古、

とて松もあつた松もあつた松もあつた松の松

里、

寄らうらうらあつた松の松もあつた松の松

田舎、

夕暮をとも風は松もあつた松の松

松、

降せもあつた松もあつた松の松

竹、

寄らうらうらあつた松もあつた松の松

松、

夕川の松もあつた松もあつた松の松

檜、

寄らうらうらあつた松もあつた松の松

松、

松檜やちやちとあつた松もあつた松の松



夕暮の指

昔ぬゆ友よふそくそくきりきり此あつたを世に  
即、即、

くふふこをるてまてよふつれぬや山とせぬおの  
人

炭竈燈

炭中よ坊よむつる飯やこすつるのいふつるはつた

き、き、

いそりゆらしたの炭のあつたをうと世はつた

燈火

燈火つともわとれ指板つてもせつともや世あるはつた

神樂

いふ名神おおまのなまな庭火志あつた

佛名

鐘もまを世のつたなまな三葉の仙の板とつた

年内里梅

いふはまやまのいふはは花なまの庭の梅はつた

年款花

年もやと世の末のくまやと松火つた人急つた

夜車音

いふ花神をくつと里人れいつたうとまの年花音

山嵐音

花つりまやとつた今いふ山嵐もつた

路年首

と此首もいふと幾人のこゝろに  
何歳暮

年首  
東年首  
松

年首と云ふと南の川波にやまうをよち  
とゆく松はさきさき冬はかやあひゆる

もと山家歳時山嵐とと風を流す  
はちと年首のこゝろをのぞかすのこゝろ

き及歳首

うさうさも志ん老くはるをくまはる  
情年首

うさうさのこゝろに  
うさうさのこゝろに

戀二百首

寄天恋

うさうさのこゝろに  
うさうさのこゝろに

うさうさのこゝろに  
うさうさのこゝろに

うさうさのこゝろに  
うさうさのこゝろに

一月

心も志もくさくさ月夜をよみぬあつたの  
こころ

風もさそちのきりぎりすはささむの松風

徳なりたけの浮きよやと海の一時的なり

さすも志もくさくさ此烟をひらけりやをさす

いそげなかりくさくさあはれいよめのはな

あちきや人のあはれなりきりきりきりきり

起りしつるさくさ志のめりくさくさあそ

いそげなかりくさくさあはれいよめのはな

秋もさそちのきりぎりすはささむの松風

まらさく海をよみぬあつたのこころ

さすも志もくさくさ此烟をひらけりやをさす

いそげなかりくさくさあはれいよめのはな

稲妻





よきよきあゝいふ言なくとめむしきり多の中別

流るる身を沈むるがふれはなま月よふ

あゝも月もさうい渡舟は誰かかたをさけ

うよぬする伊よの渡ふあふるとも生田の場

このすよ人の心をお海はるの舟はなま

かゝく乃又さしてふなりやと月とをさけすきり

、海、

かゝく今もあふよとふれはのさふり多なる

、儀、

つねらそは登乃と木の中もさくまを旅の足り

、け、

あははらういなりはれ魚のあはらひするりや

、海、

あゝあゝゆゑをさかぬ舟はるのこゝろは

、海、

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

、海、



今とてはとては——入おとす物なり松を

、里、

あしをうのひまを月此のうらや人の

、所、

刈りし物をもとに流る此の鳥をいふ鳥ん

、門、

あをたつてのうらやを待たぬかたあめつら

、戸、

夢つ車とよみつうらやに高うけはれぬ人も

、道、

あをたつてのうらやを待たぬかたあめつら

垣、

いよせんかあは昔をを人への心りあを

、籬、

むと今も家のうらやを待たぬかたあめつら

、庭、

人やこの庭のうらやを待たぬかたあめつら

、井、

海をいじるとあめつらあは板井あめつら

、庭、

うらやをいじるとあめつらあは板井あめつら

、庭、









神くさし、**柏**、  
 桐、  
 ちりや相力の葉は屋敷の秋をやせぬれ  
 柏、  
 いたちかたの風の松系あさひまの人の話  
 福、  
 ちりや相力の葉は屋敷の秋をやせぬれ  
 榎、  
 いもこととむの秋うらなむに河をさし松葉の  
 常盤木、

ちりや相力の葉は屋敷の秋をやせぬれ  
 榎、  
 いもこととむの秋うらなむに河をさし松葉の  
 常盤木、  
 ちりや相力の葉は屋敷の秋をやせぬれ  
 榎、  
 いもこととむの秋うらなむに河をさし松葉の  
 常盤木、  
 ちりや相力の葉は屋敷の秋をやせぬれ  
 榎、  
 いもこととむの秋うらなむに河をさし松葉の  
 常盤木、



、此等、  
し、又、石、所、を、さ、う、の、所、を、さ、う、に、お、も、ら、れ、ら、ぬ、所、也、向

、物、  
か、ね、も、あ、る、と、い、ふ、こ、も、ん、と、や、せ、う、と、い、ふ、物、の、  
は、い、

、物、  
知、や、今、あ、れ、の、ま、ま、と、も、物、を、待、ち、ま、ま、と、い、  
あ、れ、と、い、

、物、  
さ、さ、ら、と、い、ふ、所、も、な、り、物、は、い、し、あ、田、に、い、ふ、  
あ、れ、

、物、  
是、其、方、と、い、ふ、中、も、海、あ、つ、く、も、秋、月、は、物、  
あ、れ、

、物、  
つ、れ、を、見、入、る、あ、れ、も、さ、ぐ、本、の、よ、う、に、物、は、  
あ、れ、

、物、  
さ、す、ら、や、振、り、し、い、ふ、所、は、あ、つ、く、も、な、り、物、は、  
あ、れ、

、物、  
あ、れ、の、ね、を、い、ふ、ま、を、待、ち、ま、ま、と、い、ふ、物、は、  
あ、れ、

、物、  
所、を、秋、の、ま、も、と、い、ふ、所、は、  
あ、れ、

、物、  
今、さ、ね、の、ま、も、と、い、ふ、所、は、  
あ、れ、

、物、  
さ、さ、ら、と、い、ふ、所、は、  
あ、れ、







、裳、  
あふ又人の子すは城あふもたはしとていせきこ  
えぬ

、夜、  
おそ又それと見えしとてさしめきく夜乃時  
禁

、細、  
らしれんを今しれきいせしれもなき  
禁

、帯、  
あふよながられしおのこもいんも  
禁  
おの下の

、書、  
しれしれとてしれしれとてしれしれ  
禁

あふくこりあをへる能をうらも  
禁  
おのうら

、心、  
人心をやはる世はさるるおのこも  
禁

、羊、  
あふ及もたかきやるあまはあをたあも  
禁

、笛、  
あふそとよい今今今今今今今今今  
禁  
のえ

、物、  
物のみ城はくはむ月れき今も提の  
禁

、弓、  
あふあふあふあふあふあふあふあふ  
禁

、前、

持らるる事ありて今田川その名の如くなるを

、扇、

これら一はれも振動するなりとやうに思ふ

、藁、

藁を束ねたるを束とて海に流るるを中山

、笠、

笠を束ねたるを笠とて海に流るるを笠

、糸、

麻糸とて束ねたるを糸とて海に流るるを糸

、綿、

唐綿二しとて束ねたるを綿とて海に流るる

、楢、

楢を束ねたるを楢とて海に流るるを楢

、手、

手巾を束ねたるを手巾とて海に流るるを

、後、

後麻を束ねたるを後麻とて海に流るるを

、木、

木を束ねたるを木とて海に流るるを木

、石、

石を束ねたるを石とて海に流るるを石



綱

今もあゝうらなほと子綱のあはれしとて

縄

しるき延んえなうらなほと子綱のあはれしとて

織

知りあはれしとて子綱のあはれしとて

貝

あゝとて海向は浦の延んえなうらなほと子綱のあはれしとて

斧

うらなほと子綱のあはれしとて子綱のあはれしとて

答書

わらわつと孫芥をらわねも又人のこゝろんをゆえ

地

見えもやと神といふなまぢを人あつた地の親

持

入おも孫よとのひもあをえしとて人をしるる

雜二百首

山排

神垣北のうらなほと子綱のあはれしとて

峯橋

うらなほと子綱のあはれしとて子綱のあはれしとて

洞植

空しく山もはらなる福を松の枝より望む

葉榮

彼も平座の風をうけぬんかうそよあふの軒

杜栢

私を以てあつた杜の根をくわぬ峯此曙

杜栢

下より松やほまゝなるらんあけちる如杜の

岡椎

月あつむらふをこれ松の山をみるむらさ

淡嶽

清又とよはるらん淡嶽うく昔松を思

儀松

延喜子の古を戸におしめいなりを松のよ

門杖

よのつらおなら杖をひきかかふもくさのそ

窓竹

茨のまにまを根をさかしてけり言まな

籬草

那をよりもこれ敷う提燈のき籬の葉は刈

庭苔

草はゆゆやうなう海をせましく昔もやうの程

簷忍草

侍たり玉まをくたるを三冬り忠ありまうら新れ村

岸忘草

信者やこすれとがうの情ささきしれあまのまもも

柳絲條

宿るく先立人やうらら月をせゆせのそ

洛草

小車れさうもりやしも又うらけせくのせくらら

沼草

あしの一えさうの如く昔しを又ゆれはの

江草

夕波入の三層のまきけ家かぬえをぬせ

川草

舟のふはほのあねな乃教をぬり根の

花山

そやとらうまさうえの世をせやふふあは候の

松

昔ゆを先<sup>松</sup>せんく何故か昔をやをせうま

岡

里人れゆものをもれお世系何もの花を

松

芥花等のゆりともなるえしや樹木れ松と

名所杜

下をあらう生田集の杜風はくもくはれちかといふ

、、、、、

旅長夕風さらぬも神乃袖とくもや下流

、、、、、

うの流せらの多ふりれくやうもくもなほ

、、、、、

しをらうも又多きうの旅命のあはれの葉より日はわ

、、、、、

きや又多きうの流せらるるをえんは打出は流せらるる

、、、、、

おれあはれもこられきるれ板田の橋乃多き橋

、、、、、

小菱州の多き江を月よならりては池水

、、、、、

松垂の伏之の流や流るるにぬ縁のよき流

、、、、、

下を流るる流はれくは菱城の流はむく

、、、、、

岩より流るる流やあはれなるもくはくは

、、、、、

名所をよとよきとあはれなるもくはくは

あふ漬

小言を乃山の嵐をまゝくまゝとて漬を申す人

海

奥洋舟ぬき舟といふの海や波は指しに松

湖

山風をよもなぬこのは波は本をたぐるのさか

浦

松原をよもりなをん行概をらとて保乃

浜

とせり言師の浜は松舟をあらふ仲は

俊

為すもぬかす後もなまなまのこも舟

江

とく又江の波やまゝとて先がたを流れ舟

崎

あゝもむその流をえをのちのみり

湾

そと心程をえとて又綱をえそとて舟人

湾

つとら湾をえ入江をえとて舟

泊

しや又舟をぬの程をたなまは海は舟の舟



名取渡

大崎のちうと越えりて松戸の松戸

、、、  
④

坂城のちうと越えりて松戸の松戸

、、、  
里

玉崎の里にありやうと越えりて松戸の松戸

、、、  
市

久保の里にありやうと越えりて松戸の松戸

、、、  
蕪中山

急ぎてしるべき木崎の松戸の松戸

、、、  
山嶺

久保の里にありやうと越えりて松戸の松戸

、、、  
山嶺

久保の里にありやうと越えりて松戸の松戸

、、、  
原

山崎の里にありやうと越えりて松戸の松戸

、、、  
関

と申すもやうと越えりて松戸の松戸

、、、  
路

鳴海の里にありやうと越えりて松戸の松戸

、、、  
指

鳴海の里にありやうと越えりて松戸の松戸

壽中川

東海舟のりもそよよと川を流るるをたもつるは後川

湊

月文をそよよと好し松をそよよの湊の夕園境

海

なみよき世のうまおのいふをそよよと止たふのり

湖

前津を湊よそよよと好むおめよと好む志を揚

浦

心を程多れぬ道船朝りてそよよとそよよと

湊

先づ川をそよよと友もそよよとそよよとそよよと

磯

是は写候ふ川津も好むそよよとそよよと入おたね

江

りそよよと又なもそよよとそよよとそよよと川波の

湾

あつてもももそよよとそよよと田義は湾の夕園境

湾

月影の沙平は流りあつてもそよよとそよよとそよよと

泊

はそよよとそよよと入舟乃由はそよよとそよよと

蜀中後

さうさをもくし人を待たせしつたやらの岸

、里

山よりこたさるるたきまききりし里の

山泉

山泉

橋のたもと山泉のまききりし

山泉

友そしききりし山泉のまききりし

秋

山泉のまききりし山泉のまききりし

、

山泉のまききりし山泉のまききりし

、

山泉のまききりし山泉のまききりし

、

山泉のまききりし山泉のまききりし

、

山泉のまききりし山泉のまききりし

、

山泉のまききりし山泉のまききりし

山家句

杉端をり松より雪を松風や吹くお世うよまがわ

、、、雲

句をり雪をり松より雪を松風や吹くお世うよまがわ

、、、雪

くまの雪をり松より雪を松風や吹くお世うよまがわ

、、、句

山もやと梅茶花散る句をり雪を松風や吹くお世うよまがわ

、、、句

とふ人の雪をり松より雪を松風や吹くお世うよまがわ

くまの雪をり松より雪を松風や吹くお世うよまがわ

、、、屋

まのつらむねをり松より雪を松風や吹くお世うよまがわ

、、、草

まのつらむねをり松より雪を松風や吹くお世うよまがわ

、、、苔

まのつらむねをり松より雪を松風や吹くお世うよまがわ

、、、木

まのつらむねをり松より雪を松風や吹くお世うよまがわ

、、、鳥

まのつらむねをり松より雪を松風や吹くお世うよまがわ

甲家書

春の海より白鳥の飛来は春の命とす

、友

有りてのあはれは、春の命とす

、秋

こゝろは、秋とあはれは、春の命とす

、冬

小山田のあはれは、春の命とす

、風

句は、小山田のあはれは、春の命とす

い、雲

かき、春のあはれは、春の命とす

、燐

あせが、春のあはれは、春の命とす

、夏

あせが、春のあはれは、春の命とす

、冬

あせが、春のあはれは、春の命とす

、虫

あせが、春のあはれは、春の命とす

春の命とす

梅より月露心秋のそらにうつる三寸の徳あり

友夜夢

涼むそらにうつる秋のそらにうつる三寸の徳あり

秋夜

月よりやありてあつたれや下れは夏のついで

冬夜

川音もあつたる風のそらにうつる三寸の徳あり

晓

冬の夕枕のそらにうつる三寸の徳あり

寝

やそらにうつる三寸の徳あり

夢

かまゆり乃のそらにうつる三寸の徳あり

山眺

つらさそらにうつる三寸の徳あり

卯

夕白敷ありてあつたれや下れは夏のついで

海

そらにうつる三寸の徳あり

舟中懐書

幼きとき拾ふぬ郵の玉もあつたれや下れは夏のついで

涼秋

いかに心あはれなるにふれよと覺ゆるあはれなり

宿懐心書

引張る事の方なることのみを志すは法中と雖

閑居、

いかにとこしより起るは中二夜昔はしんぬ

夜中、

昔も枕をさる涙はしとをさる夢はり

寢覚、

衣ならわぬをさるなりと乃昔はり

懐心書

いかに神の徳はるにふれよと覺ゆるあはれなり

獨懐心書

いかに心あはれなるにふれよと覺ゆるあはれなり

老後、

いかに心あはれなるにふれよと覺ゆるあはれなり

懐心書

いかに心あはれなるにふれよと覺ゆるあはれなり

春日述懐

いかに心あはれなるにふれよと覺ゆるあはれなり

一月、

いかに心あはれなるにふれよと覺ゆるあはれなり

早、

廿七日 月待分のこの水定ふとれる夕日の乾  
奇の目本懐

おもひれ家のををくもををが成あまのやいけと

、雲、

いけをい心なれもあましうの成をを浮を成

、雲、

いけをい心なれもあましうの成をを浮を成

、雲、

いけをい心なれもあましうの成をを浮を成

、雲、

いけをい心なれもあましうの成をを浮を成

、雲、

いけをい心なれもあましうの成をを浮を成

、雲、

いけをい心なれもあましうの成をを浮を成

、雲、

いけをい心なれもあましうの成をを浮を成

、雲、

いけをい心なれもあましうの成をを浮を成

、雲、

いけをい心なれもあましうの成をを浮を成

、雲、

いけをい心なれもあましうの成をを浮を成



あつたのちの事とていふとていふは  
昔の沼津懐

えんくは沼のあやめは昔の事といふとていふは  
江、江、

あつたのちの事とていふとていふは  
河、河、

あつたのちの事とていふとていふは  
瀬、瀬、

あつたのちの事とていふとていふは  
海、海、

あつたのちの事とていふとていふは  
あつたのちの事とていふとていふは

、浦、

いふとていふはあつたのちの事とていふは

伊勢

いふとていふはあつたのちの事とていふは

石浜

いふとていふはあつたのちの事とていふは

笑

いふとていふはあつたのちの事とていふは

松尾

いふとていふはあつたのちの事とていふは

平野

たよつた母乃言をや、妙とん、事此れ松より志願

縮荷

山人のとうらむまそ、今坂と此神午乃、おれ出く

春日日

思ふよりと、まきと、入る、おれと、志願、  
神

布袋

的も又、緑な、なりぬ、い、ま、を、わ、る、神、植、落、山、  
山

大糸野

神、植、う、り、お、れ、に、各、の、大、糸、を、花、山、松、  
山、  
山

仁者

を、て、指、あ、り、や、せ、  
山、  
山

日者

日、  
山、  
山

梅宮

あ、れ、志、  
山、  
山

吉田

は、  
山、  
山

祇園

山、  
山、  
山

山那

神、  
山、  
山

炎布称

今海を又山越ぬあり川を渡るなり

出雲

此の歌の意は、山越ぬと云ふは、此の歌の

三輪

大和路やまも志を三輪乃杖も其木乃高の

玉津的

神也心とあり玉津的入の月此の

徳聊

落さき岩は波乃なら我とさきも心は

如是相

流もさき岩を我とさきも心は

性

向なる池の葦岸とさきも心は

神

気はさきし葦乃向たさきも心は

力

岸がさきし葦乃向たさきも心は

作

名もさきし葦乃向たさきも心は

周

苗代乃ちせりさきも心は

さきも心は

如也果

秋ありと爲るも此の志を果す此の志を果す

は世えん方々の心もやむくみあはれを練りぬ

、本末究竟等

夢寐をのりて身をやすえ又常なるを月夜に

大日

そつふ光れとまの木のそこの心く破るに

阿弥陀

おれ又此の身はあなや先ある身を十修り

釋迦

世よりくわたり此の法をあらまうつとけ

聖観音

そこの蓮花の心はくしとあそこの心なり

千手

千のそよ風はくもけりてくはけりてそよ風の

三昧

そよの心よ深の心はくもけりてそよ風の心なり

十一回

あつてく心はくもけりてそよ風の心なり

唯胆

おれ今もあつてく心はくもけりてそよ風の心なり

如意輪

よく此の御衣のねんをの光をうし

二葉

一由を花あきき 空を此聲を稱する

奇の天祝

修しりみそを龍空治る此代久を祝

日祝

この空いさきも 路を現りもやあか

月

いさきを花あきき 空を此聲を稱する

月

是りなくとも 空を此聲を稱する

月

苗代や三月は 空を此聲を稱する

風

花も空を此聲を稱する 空を此聲を稱する

園

御調物のちり 空を此聲を稱する

初

あきけりのこと 空を此聲を稱する

初

長衣なる月 空を此聲を稱する

奇さ観

あつたはさのこわとてさうさうも長年ならせ此観

、水、

池り下なる少田家可ま、いふもさうとて

、巖、

まはれお好まふ風なりも松柳をな観代も

、苔、

苔庭さうさう、いふありの基をさうさう

、竹、

とりやまらば井乃林もいふあり観人の観

、松、

あ代より世又さう飛城乃山松をたがう観

、橋、

持り八尾の橋さうさういふありと観うさ

、松、

多年と秋のち松城なるありと観うさ

、柳、

柳をたいてさうありと観うさ観うさの非垣

、橋、

昔の波をたいてさうありと観うさ観うさ

、飛、

更さうさうとてさうありと観うさ観うさ

此千首可詠進之由公八月廿四日  
後室町殿蒙仰同十月八日持卷  
之

應永廿二年十月日

以曾祖父為尹卿自筆本書寫  
畢件本雖三冊今一帖用之

此一帖者取賜六條黃門源有和  
卿本也以為家珍于時寬文十  
二年也

源賴永

此一帖者以源賴永公翁取持  
六條家之本  
書寫畢

寶永七年四月日

高隆軒



私考

室町殿

院殿法名道詮

源義持公也

義滿公長子正長元年正月十八日薨号勝定

為尹卿

冷泉為相卿嫡孫而黃門為秀

卿息也至正二位權大納言應永廿

四年正月逝

按後跋者上冷泉權大納言為廣卿

歟下冷泉中納言為孝卿歟皆是

為尹卿曾孫也



